続・メロス　―ディオニス王の後世―

KAKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続・メロス　―ディオニス王の後世―

【Ｎコード】
Ｎ９２１３Ｓ

【作者名】
ＫＡＫＵ

【あらすじ】
ｉｎｔｅｌとマガジンハウスの「あなたを作家にするプロジェクト」で一度掲載していたものですが、未完でした。しかし、そちらのＨ．Ｐ．は今では続きを載せられなくなりましたので、その続きをこちらでまた新たに一部改定をしながら掲載していきます。ファンフィクションではなく、「走れメロス」の続編として書いていきます。
物語は、あのメロスが再び親友に会いにシラクスの町に訪れた…というところから始まります。

第1部　シラクスの広場

第1部　シラクスの広場

実にそれは15年ぶりだった。メロスは久しぶりに、親友のセリヌンティウスに会いに再び十里離れたシラクスにやってきた。すると、前回来た時よりも、町はとてもにぎやかになっていた。そして通りでは、たくさんの人々が行き来していた。そうだ、奴に会う前にせっかくだからワインでも買っていってやろう。きっと喜ぶに違いない。そう思ってメロスは、町の中心の広場で開いている自由市にやって来た。すると、通りの両側には華やかな旗がひらめき、今日が何か特別な日だということに気づいた。そして町の広場にやってきた。

「おーい！　誰かこの辺りで一番うまいワインを売っているものはいないか？　私、メロスがはるばる、ここより十里離れたわが村より、親友に会いに今やってきたのだ。そして、彼のためにここらで一番上等なワインを探している。誰かこの近くにワイン屋を知っているものはいないか？」

すると今までに、にぎやかだった群衆が、鎮まり返り、メロスの周囲から20尺ほど離れた。すると、広場の中心の高台に今、頭に皮の袋をかぶせられた5人の男女が、磔にされていたのが見えた。

「これはいったいどういうことだ。誰か教えてくれないか？」

メロスは自分の周りを取り囲む者たちに問いかけた。

「これから、一体何がおこるんだ？」

すると、ある若い娘がメロスの前にまっすぐにやって来て言った。

「公開処刑よ。」

「処刑だって！？　そんなバカなディオニス王は改心したはずではなかったのか？」

メロスは周りの者たちに聞こえるように大きな声で言った。すると、

先ほどの娘がまた、話し始めた。
「あれはもう、今から15年も前のことよ。ある時、ここから十里離れた村から一人の青年がやってきたの。その男はこともあろうに、今は亡きディオニス善王を殺しにやってきたの。当時の若かりし王は、周囲に敵も多くいて、毎日を生き延びるために大変、精神をすり減らして暮らしていたのよ。そんなときにあの男が突然にこの町に現れ、王の命を狙おうとした。しかしその作戦もうまくいかなかった。そして挙句の果てには、その男のために、何の罪もない、この町の青年が、突然深夜呼び出され、王の家来たちに連れ去られ、鞭を3日間打たれ続けたの…。」
メロスは青ざめた。
「まさか、その鞭打たれた青年というのは、セリヌンティウスか…。」
「ええ、そうよ。」
その娘は、目に涙を浮かべて答えた。
「泣いているのか。」
メロスはその娘に言った。
「そうよ、泣いておかしい？」
その娘は言った。
「けれども、彼はその親友にちゃんと助けられただろう。」
「助けられたですって！？　彼は…いえ、…パパは誰のために鞭を打たれ続けたの？　ええ、確かにその『親友』って男は来たわ。でもね、そもそもその男がこの町に来て、王様を殺しにさえ来なければ、パパは早死にしなくてすんだのよ！」
娘は叫んだ。
「キミがセリヌンティウスの…娘なのか？　彼は、死んだのか…？」
メロスは困惑しきっていた。
「詳しく教えてくれないか？なぜ、彼は…。」
メロスが言い終わらないうちに、その娘が言葉をさえぎった。
「パパは石工で、仕事柄肺が悪かったのよ。時々苦しくて咳き込ん

でいたってママが言っていたわ。それなのに…あの3日間、ずっと、パパはその男のせいで、何の罪もないのに、鞭を打たれ続けたのよ。たしかにその男は来たわ。でも、だからそれが何よ。そのせいで、パパはもう石工もできなくなり、その後寝込むようになったのよ。そしてその代わりにママが働くようになったのよ。そのときママは私を身ごもっていて、それでもパパを愛していたから、パパの高い薬代と生活のため、ママは昼間は、午前中は公衆浴場で働き、お昼からワイン飲み屋で働き、夕方からは宮廷で、王様たちの晩餐会の支度に追われたのよ。それでもママは頑張って、私を産んでからも働き続けたわ。それに、私だって、小さいときから、パパの看病をしていたわ。食事の支度だって、ママが家にいなかったから、全部私がやったのよ。家畜の世話だって、私がしたのよ。朝はヤギたちの乳絞りから、餌出し、パパと自分の朝食の支度に、後片付け、部屋の掃除に、家畜場の掃除、ヤギたちを村はずれの草原に連れて行って、夕方に戻ってきて、今度は夕食の支度…。全て私がやったのよ。同年代の子供たちが遊んでいる姿を見てとっても羨ましかったわ。時々泣きたくもなった…。ママにすぐにでも会いたかった。でも、ママだって大変なことわかっていたから、我慢したわ。」

「そうだったのか…。私はぜんぜん知らなかった。」

「それにね、王様だって、確かに心を入れ替えて、人を信じるようになったわ。すっかり『良い人』になったってママが言っていたわ。そしてね、どうなったと思う？　今から2年前に、晩餐会の最中に、毒を盛られて死んでしまったわ。」

娘は言った。

「あのディオニスまで…まさか、そんな…。」

「王様は、警戒を解いたのよ。これからは人を信じようとしたのよ。そしてみんなの意見を聞き入れようとして、お城を開放したの。でもそれが仇になって、城にはやすやすと敵国の暗殺者が入ってきたの。そしてその者によって王様は毒殺されてしまったの。」

「……。」

メロスはその娘になんて声をかけていいのかわからなかった。自分の「理想」が、今、目の前にいる一人の娘の人生を変えてしまった。そして、無二の友セリヌンティウスを死なせてしまった。それにあの暴君、いや、かつての暴君ディオニス王までも、皮肉にも当初の彼の計画、いや、そんな立派なものではなかった。その場のひと時の感情…激情、いやただの激怒だった。短剣で一刺ししようとした、そのときできなかったことが、彼を信じ改心した王の命を結果として、奪うことになってしまった。少なくともそのきっかけを作ってしまった。

「なんて…なんて、私は単純な男だったのだ…。」

メロスは牧人であった。毎日笛を吹き、羊と遊んで暮してきた。家族も当時、内気な妹一人だけであった。だから気楽であった。自分は常に正しいとそう信じてきた。物事は単純明快だとそう感じていた。内気な妹が兄のしてきたことの不始末を補ってきたことなど夢にも思っていなかった。親友なら自分の言うことを何でも聞いてくれるとそう思い、その通り行動をしてきた。親友が肺を悪くしていたなんてぜんぜん知らなかった。それなのに自分は、自分が戻ってこなければ、親友を絞め殺しても構わないといい、親友を私の代わりに差し出してしまった…。

「それなのに、なんでキミは私に文句の一つさえ言わずに、…そしてこの世を去っていってしまったんだ、セリヌンティウスよ。」

メロスは今、15年前のことをとても後悔した。

そしてメロスは独身だった。親友のことを心から愛している奥さんがあの3日間、どんなに親友のことを心配して夜も寝付けない状態だったか、そんなことまで全く気づくことができなかった。そして、宮廷という人の欲望が渦巻く世界で毎日を生き抜くために培った「知恵」なんか、牧場で羊と遊んでいたメロスには逆立ちしたって知ることなんてできなかった…。メロスはあの時から、今の今まで自分は勇者だと思って生きてきた。だが、それは随分と独りよが

りなあさはかな考えだったと自分を恥じた。世の中は自分が考えているほど、単純じゃなかった。それに、今メロスはようやく気づいたのだった。

メロスがしばらく呆然と立っていると、新王の警護隊がまわりを取り囲んでいた。

「彼がメロスだな。」

と一番前の大きな男が、その娘に言った。

「ええ、そうよ。今は亡き善王を暗殺しようとした男よ。そして、わたしのパパを殺した男よ。」

とその娘は言った。

「ひっ捕らえろ！」

と警護隊長は自分の部下に命令を下した。

警護隊によって捕らえられたメロスの運命は？

また、広場で5人の男女が磔にされた理由とは…

物語は第2部へとつづく…。

第2部　新王の居城　お楽しみください。

第2部　新王の居城

第2部　新王の居城

メロスは町の広場で、兵隊に捕まり、縄で両手を縛られそこから騎馬部隊に引かれながら、広場を後にした。そして、町の西の丘に威風堂々と建つ、お城の中へ捕虜となってつれられていかれる姿を、群集の多くに見られた。こんな辱めを受けたことは生まれて一度だってなかった。

この町に来るまでは自分は勇者だった…それが今では、罪人だった。15年前のあの日以来、自分は勇者としての誇りと歓喜に満ちた世界にいた。そして勇者にふさわしいプライドを持った。それがセリヌンティウスの娘に会ったことで、地獄に叩き落されたような気分になった。今日ここに来なければ…俺は勇者でいられた…とそんなことが一瞬メロスの脳裏によぎった。

メロスは依然手を前で縛られたまま、城門の中に入った。すると4人の兵士がそこから加わり、メロスの周りを取り囲んでそのままついてきた。すると正面には凝灰岩でできた堅剛な大きな建物が見えた。正面の大きな木の扉の中から入っていった。左右の壁には松明が燃えていた。左に曲がり、そこから地下へと続く螺旋階段を下っていった。すると、窓のほとんどない場所に出た。鉄の太い格子のある部屋がいくつもあった。扉はすべて分厚い木の扉で太い鉄の閂がついていた。そのうちの一つの扉を兵士が開けた。

「さぁ、ここへ入るんだ。呼び出しがあるまでここでおとなしくしていろ。」

そういうとメロスの手からロープを解いた。メロスはおとなしく中に入った。

「王に…王様に、会わせてくれ…。」

メロスはか弱い声で言った。しかしそれに答える兵士は誰もいなか

った。そして分厚い木の扉が閉ざされた。そして兵士は、全員そこから出て行った。メロスから見える景色は、小さな鉄の格子から見える松明が1本だけであった。

　それから、どのぐらいの時間が過ぎたのだろうか？　メロスは自分のお腹がなったことで今朝、食事を済ませたきり、今まで何も口にしていないことに気づいた。

「おーい、誰かいないのか？」

メロスはここに入ってはじめて声を出した。このままでは力が入らない。せめて食事をもらおうとメロスは考えたのだった。

「おーい、ここにはだれも兵士はいないのか？」

メロスは言った。すると、奥のほうから、ゆっくりとした足音が聞こえてきた。

「ここでは食事がもらえないのか？」

メロスは尋ねた。メロスにとって、監獄は初めてであった。すると、木の扉の小さな窓が開いた。メロスは外を見ようと顔を近づけた。すると、いきなり、こぶしがメロスの鼻に命中した。メロスは部屋の反対側の壁まで吹っ飛んだ。鼻から生暖かい液体が流れ出てきた。

「ふぅーっ。おい、きさま！　ここをどこと勘違いしてる。俺はお前の奴隷じゃないぞ。いいか、ここでは俺が神様だ。よ～く覚えておけ。神様の機嫌を損なうと今よりももっとひどい目にあわせてやるから覚悟しろ。」

凄みのある声がメロスを脅した。

「食い物はその時間になったら与えてやる。もっとも乾燥したパンとワインだけだがな。水をもらえるなんて思うなよ。」

それだけいうとその男はまたさっきのところまで戻っていった。

　しばらくすると、

「メシだ。起きてドアの前で待て！」

兵士が言った。先ほどの男の声だった。メロスは扉の前で待った。そのうちに、扉がノックされた。

「おい、メシだ。受け取れ！」
先ほどの声が聞こえた。
「これだけ、なのか…。」
メロスは言った。
「ああ、そうだ。これだけだ。明日もこれだけだ。あさってもな。いつもこれだけだ。よ～く覚えておけ！」
その兵士は言った。木の板の上に直接、かさかさのパンと真鋳でできた凹凸のあるコップには赤ワインが入っていた。それだけだった。メロスはそのパンをコップの中の赤ワインに浸して食べた。また木の板に散らばったパンの屑も丁寧に集め、またコップに入れて、残りを飲み干した。目頭が熱くなってきた。涙が出てきた。けれどもすきっ腹にワインがきいたのか、そのまま横になって丸まった。メロスはそのまま眠りについた。

メロスは夢を見ていた。
メロスはまだ小さな子供だった。そして部屋の中にいた。そこには、小さなベッドと木馬に輪回しなどが置かれていた。子供部屋のようだ。その部屋はなんとなく見覚えがあった。懐かしい部屋に感じた。
「メロス、どこにいるの？」
懐かしい声だった。
「ママ？　僕はここだよ。」
メロスは答えた。すると、美しいドレスを着た女性が二人の召使いを従えて入ってきた。
「メロス！」
「ママ。」
その女性はメロスをしっかりと抱きしめると、彼の額にキスをした。
「メロス、いい、これから私の言うことをよく聞くのよ。」
「うん…。」
「いい子ね。もう間もなくここに敵が押し寄せてくるの。だから今

から、この城を一緒に抜け出します。」
「うん、でもパパは…。」
「王は、一緒にはついて行けないの。でもトレウスが一緒に来てくれることになっているの。だから心配はいらないわ。」
そういうとその女性は、二人の召使いにメロスの身支度を整えさせた。
準備ができたら、私に教えなさい。」
「はい、お妃様。」
次に場面は、林になった。メロスは馬に乗っていた。黒くて速い馬だった。男の背中に後ろ向きに太い紐で結ばれていた。後ろからは、3頭がついてきていた。そのうちの1頭を操る男の背中に今、矢が刺さり、男は落馬した。またしばらく走ると、今度はもう一頭の馬の後ろ足に矢が刺さり、馬が急に後ろ足を上げたので、乗っていた男が落ち、そこにその馬が倒れこんだ。残るは2頭になった。
「トレウス、止まらないで走り続けなさい！」
メロスの母の声だった。そして2頭の馬は走り続けた。すると前方に弓を構えた敵の兵士たちが、突然現れた。その直後、弓が放たれた。トレウスはなんとか剣で振り払い、その間を抜けきった。しかし、後ろの馬を操っていた女性の肩に弓が命中した。それを見たメロスが叫んだ。
「ママーッ！」
すると、トレウスは馬を反転させ、そこに戻っていった。しかし、妃は、馬から降りて取り押さえられていた。トレウスは、救出は不可能だと感じた。王と妃の前での約束を果たすときだと考えた。トレウスはまた、元の道を先に進んだ。
「ママ、ママが…ママがつかまったよ！　助けてよ。トレウス、ママを助けて！」
しかし、トレウスはそのまま馬をとめることなく走り続けた…。
また、場面は変わった。今度は緑生い茂る美しい牧場だった。周

囲は深い森に囲まれていた。そこで、少年に成長したメロスは剣を習っていた。
「そうじゃない、メロス。敵が前から切りつけたときは、こうやって受け止めるんだ！　もう一度、はじめからやろう。」
「ねぇ、いつも思うんだけどさ。なんで羊の世話をするのに、剣の練習なんてしなければならないのさ、トレウス？」
「それは、いつかこの剣が必要になってくるときがくるからです。今、ここはとても平和な場所だとお思いでしょうが、誰かが必死になって、この地域を守っていることを忘れてはいけません。そしていつか、メロスが大きくなったときに今度は命がけで何かを守らなければならないときがやってきます。その時こそ、きっとこの剣が役にたちましょう。」
「その時っていつだい？」
「さぁ、それは私にもわかりません。」
「でもさ、そんなときはトレウスがいるじゃない。だってトレウスの剣の腕はこの国で一番だって、パパが言ってたよ。」
「いえ、2番でしたよ。あなたの父君には勝てませんでしたから。」
「そうかなぁ？　僕にはトレウスが一番強いって言ってたんだよ。」
「そうでしたか…。しかし、いつまでも私に頼っていてはいけません。永遠に私がそばにいることはできないのですから。メロス、私よりも強くなるのです。」
「そんなの、絶対に無理だよ…。」
「いいえ、可能です。私も人間です。人には必ず隙があります。神ではないのですから。自分よりも相手が弱いと思っているときの『余裕』や、その相手に自分が思いもかけずに、やられたときなどの『悔しさ』。そんなときに、人は冷静さを保つことを忘れてしまいます。そのわずかな感情の隙間がこちらの勝機につながるのです。その隙をうまくつくのです。そうすれば自分よりも強い相手でも倒すことが可能になります。それを忘れないことです。それと、やられる前に相手をやる。これが生き延びる秘訣です。」

「パパとママは今頃どうしてるのかなぁ…。」
「お父上とお母上に会いたければ、今はしっかりと剣の修行と、そして、羊の毛刈りを早くできるようになることです。」
「それなら、得意だよ。僕もう3分で、1匹分刈れるようになったんだから。」
「なら、2分で刈れるようになりましょう。」
「え～っ！？　トレウスはいつからスパルタ人になっちゃったんだい？」
「私は生まれたときから一度たりともスパルタ人をやめたことはないですよ。では、その『スパルタ式』でいきましょう。さぁ今度は私がお相手します。本気でかかってきなさい！　では構えて。メロス。」
そして、剣がぶつかる激しい音がいつまでも聞こえ続けた…。カーン、カンカンカン…。

ドンドンドン…激しい音が聞こえる。メロスは扉をたたく音で今、目を覚ました。
「おい、食べ終わった食器を出すんだ。いいか、次からは、食べ終わったら必ずこの窓の近くに置いておけ！　さもないと次の食事はないと思え。」
すると、メロスは急にうなった。
「ううっ…、胸が焼けるように苦しい！　助けてくれ！」
「なにっ！？　仮病じゃねぇだろうな？」
「うそなもんか、本当に苦しいんだ。頼む、お願いだ。このままでは俺は死んでしまう。」
「どうすればいいんだ？」
「頼むから俺の背中をさすってくれ、そうすれば落ち着くんだ。いつもそうだ。さすってもらえさえすればすぐに直るんだ。だからお願いだ、少しの間でいい、すぐに俺の背中をさすってくれ。」

「わかった。待ってろ。今入るから我慢しろ。」
すると、兵士はカギを開けて中に入った。すると、そこにはいるはずのメロスがいなかった。
次の瞬間、その兵士の頭にメロスが降りかかってきた。メロスは素手だったが、力一杯、男の顔を横にひねった。それで十分だった。男はそのまま床に倒れ、二度と起きなかった。メロスはその兵士から護衛の短剣を引き抜くと、腰につけ、そこから抜け出した。いつまでもこんなところにいるわけにはいかなかった。まずは城から抜け出すのが先決だ。
メロスは用心深く、右回りの螺旋階段を上っていった。短剣を左手に持ち替えた。メロスは両腕で剣を扱うことができた。螺旋階段の出口から通路を覗き込むと、通路の出口には二人の兵士が見張りをしていた。ここを抜け出すにはあの二人を何とか倒さなければならなかった。こんな短剣ではダメだ。もっと大きな剣があれば…。メロスは出口と反対側の通路へ向かった。しめた！　誰も奥にはいないぞ。
するとまず近くの部屋に忍び込んだ。思ったとおりだった。その部屋は兵士たちの部屋だった。木のテーブルの上にはバック・ギャモンの盤がゲーム途中のまま2つ置かれていた。1つの盤は黒石も白石も互角だったが、もう一方は断然白石が有利であった。石の進め方がとてもうまかった。さて、ここなら余っている剣がきっとあるに違いない。メロスは部屋の中ほどに向かった。2つ目の部屋に入ると、鎖帷子があり、盾と剣が見つかった。メロスはそれら一式を取ると早速着替えた。
次に食堂に向かった。壁の棚にある、丸い大きなパンを手でちぎった。また、同じ大きさの丸いパルミジャーノ・タイプのチーズを短剣で一切れ切り取るとそれにかぶりついた。また、棚にはなみなみ注がれた水とワインの入ったデキャンタがいくつも置いてあった。メロスはその水の入ったほうを手にとるとそのまま口に流し込んでいった。それと、鼻の周りの血もその水で洗い落とした。よしこれ

でいい。すぐにでもこの城から出よう。私を止めるものは誰だって容赦はしない。ようやくメロスの心に「勇者」の力が湧いてきた。そして、出口へと向かった。

出口の前の二人の衛兵の前を通ろうとしたときだった。片方の衛兵に呼び止められた。

「おい、今頃どこへ行く。」

「……。」

「返事をしないか？　お前はどこの所属だ。見慣れん顔だな。」

その衛兵はメロスに言った。

「ああ、そうさ、昨日この城に来たばかりなのだから。」

するとメロスは剣を構えた。

「お前は！　昨日町の広場から連れてこられた奴か。」

「ああ、そうだ。冥土の土産に教えてやる。私の名はメロスだ！」

衛兵は左右に分かれてメロスに対峙した。メロスは腰を落とし、剣を中段に相手に向けて構えた。そして、もう一方の相手を見据えた。一瞬、二人の兵士は、立ち止まった。メロスが二人を相手にしても、堂々としかも隙のない構えをみせたからだった。そして、二人がほぼ同時にメロスに切りかけてきた。メロスは少しもあわてなかった。二人とメロスは直線上にいた。メロスはすっと一歩下がり、体を右に回転させ、盾を持った左手を遠心力に任せて相手の顔に思い切りぶつけた。相手の顔は醜くつぶれ、その場に崩れた。そして次の瞬間、もう一方の相手の首を右手の剣が正確にはねた。わずか瞬きの間にメロスは二人を倒した。その首はコロコロとタンポポの咲く、緩やかな勾配の道を転がっていった。そして、向こうから歩いてきた女中の木靴にぶつかってとまった。

「キャーッ！　誰か、誰か！　首よ、男の首よ！　誰かきて！！」

するとその声は庭で朝の剣の練習をしていた兵士たちのところまで届いた。そして兵士たちは血塗られた剣を持つ一人の男を見つけ出していた。そして、メロスのそばまで来たのだが、急いできた兵士たちは、鎧も盾もなく、片手に剣だけの姿だった。しかし、人数

的には圧倒的に兵士たちのほうが有利だった。メロスは兵士たちに周りを囲まれてしまった。
　するとメロスは考えて、しっかりとした声で言った。
「この城の兵士は、皆腰抜けぞろいか！　たった一人にこんな大勢でないと戦えないっていうのか。誰でもいい！　この私と1対1で剣を交えることのできる強い者はいないのか！」
　これは効果があった。多勢に無勢では勝ち目はない。しかしメロスは1対1でなら負けない自身があった。しかもこういうところで出てくるものは、たいてい血の気のある一番強い猛者が出てくる。だからそいつを倒せば周りのものは、恐れて退く。そのときこそ、堂々と抜け出そうと考えた。
「貴様〜っ、生意気な口を利くのもそれまでだ。この俺が、お前の首を今からはねてやるから覚悟をしろ！」
と目の前に、まさに頭に毛はないが血の気のある猛者がメロスの相手をしようとした。ところが…、
「おやめなさい、ミゲル。単細胞なお前のかなう相手ではありません。」
兵士たちの後ろから声がした。すると声の聞こえたほうの兵士たちが左右に分かれた。その分かれたところに後ろから1頭の美しい白い馬に乗った鉄火面を着けた者がメロスに近づいてきた。
「セルシア様…。」
ミゲルは言った。
　その馬上の騎士が、両手でゆっくりと鉄火面を脱いだ。するとその鉄火面の中から、まぶしく光る金髪が陽光に輝きながら降り注いだ。その騎士は女だった。
「いいでしょう。私が相手をします。」
すると、その女は馬から軽やかに飛び降りると、腰の剣を右手でゆっくりと抜いた。
「女が相手なのか…。」
メロスはとまどった。男なら何も気にせず、倒すこともできた。し

かし、相手は女だった。
「私の名はメロス。女と子供を手にかけることはしない。他のものとなら誰とでも戦ってやる。」
メロスは言った。
「真剣勝負に男女もなにもないだろう。メロスよ。この勝負はたった今お前が望んだのだ。1対1で剣を交えるものがいないのかと。男でなくてはダメだなどという条件、私は聞いてはおらぬ！　さては、この私に負けるのが怖いか？　女である私に倒されるのがそんなに嫌か！」
もう、メロスに躊躇はなかった。目の前にいるものは敵だ。それだけ思って戦おう。そう決心した。
「ならば、戦ってやる！　女であろうとなかろうと、私はお前を倒してこの城を出て行く。」
とメロスは言ってその女めがけて剣を振り下ろした。しかし、その剣はセルシアの剣によって防がれた。それからしばらくは剣と剣が激しくぶつかり合う音が続いた。

――「おい、もうどのぐらいたつ？」
と途中からこの勝負を見にきた兵士の一人が近くのものにたずねた。
「ああ、もう5分は裕に経っているはず…。」
「本当かよ…。セルシア様相手にそんなに長く戦える奴なんて…。この城にそんな腕の立つ兵士なんていたのかよ。」
一体何者なんだ？　と、セルシアは今自分と剣を交えている男のことを考えた。こんな剣の使い方をするものとはセルシアは今まで一度も出会った事がなかった。全く無駄な動きがない。一つ一つの動作がまるで一連の舞いのようであった。そして獲物を狩るトラの様な激しい動きをしたと思えば、軽やかに舞う蝶のようにいとも簡単に私の剣を振り払ってしまう。これこそ剣の舞だった。彼はまだわたしと同じくらいの歳だというのに…。彼の剣には全く迷いがない。5年やそこらで習得できるレベルではなかった。一体彼はいく

つのときから剣を習ったというのか？　そして彼にこんな剣術を教えたものは、誰なのか？　セルシアはメロスという男についてもっと知りたいと思い始めていた。
　この二人の勝負はたちまち城内に知れ渡り、食事をしていた新王の元にまで届いた。
「おもしろい。その勝負、私も見ようではないか。案内してくれ。」
新王はそばにいた侍女に言うと、食べかけ途中の赤ブドウを手の中でぎゅっと握りつぶして立ち上がった。その王の指の間からは、まるで血が流れ出したかのように、赤い液体が、床に滴り落ちた。

　剣を知る者ほどメロスの腕のすごさがよく理解できた。部隊隊長たちの中には、メロスをなんとか自分の部隊にいれたいと思うものも現れてきた。
「おい、もうあれから１０分は経つぞ。一体あいつは何者なんだ？」
ある兵士が隣の兵士に聞いた。すると、声をかけられた兵士が目を丸くして、
「奴はメロスだよ。お前知らないのか、あいつのこと。」
「ああ。俺はこの間、中部ガリアからここに赴任してきたばかりなんだよ。で、メロスはここらではそんなに有名な奴なのかい？」
「ああ、有名も何も、この街で知らないものは誰もいないさ。奴は前の王ディオニス様を倒しにやってきた男さ。」
「それじゃあ、ゴート族の殺し屋ってとこか？」
「いいや、この町からさほど遠くない村のただの羊飼いさ。」
「なんだって！？　なんで羊飼いがあんなすごい剣さばきができるんだ。この城で一番の剣の使い手のセルシア様とまるで互角じゃないか…。」
「いや、残念ながら、奴の方が上をいってるよ。もし、さっきミゲルが相手をしていたらものの１分で勝負はついただろうな…。あいつは前回の１５年前にも、一人でこうしてやってきて、結果的に前の王を改心させた張本人なんだとさ。この街で彼は勇者になったの

さ。そして今から2年前まではな…。」
「『2年前まで』とは、どういうことなんだ?」
「2年前、王は毒殺に遭っただろう。あれは、不幸な事件だった。犯人は未だに見つかっていない。そして、新王になって、あの事件に関わりがあると思われたものたちはみな捕らえられてしまった、一人を除いてな。ちょっとでも怪しいと思われるだけで、だれ彼お構いなしで捕まえられた。『制裁の7日間』はこういう理由で起きたのさ。そして唯一今日まで捕まっていなかったのが、あのメロスだったんだ。どういうわけか、この2年の間メロスは、行方をくらましていた。噂では、地中海を渡って別の世界に行ってしまったと言うものもいたよ。しかし実際のところこの2年間、彼がどこでどういう生活をしていたのか、知る者は誰もいない。なぜ、奴は今になってこの街に戻ってきたんだろうな…。」

メロスとセルシアの剣の勝負は未だに決着がつかなかった。剣の腕もほぼ互角のように見えなくもなかった、しかし、ここに来て、セルシアにやや疲れが見え始めてきた。そしてはっきりとメロスの剣が優位になってきたと兵士たちにも理解ができた。やがてメロスの剣先がセルシアの左腕の皮膚をわずかに斬りつけた。するとそこから鮮血があふれてきた。そして、また、メロスの剣が、今度はセルシアの金髪を切り落とした。
「きさまっ!」
セルシアは一瞬、自分のお気に入りの毛がきられたことに、癇癪を起こした。そしてわずかな時間、冷静さを失った。それが彼女の動きにほんの一瞬だが隙を与えてしまった。そして動きのバランスを失いかけた。その時、その隙をついで、メロスの剣が彼女の剣を宙に舞い上げた。そして、メロスは剣先をセルシアの顔に向けた。
「そこまでだ!」
あたりに響き渡る太い声がした。その声の主は、いつの間にか来ていた、新王の声だった。

「もういいだろう、二人とも。どちらの命も私にはおしい。その勝負、私にしばらく預からせてくれ。」
新王が言った。
「メロスよ。よくぞこの街に戻ってきてくれた。昨晩はそなたと知らずうちの無礼な兵士が、そなたを監獄に入れたと聞いた。すまないことをした。どうか私に免じて許してはくれまいか？」
「クラウディス王…。」
セルシアが言った。
「もう下がってよいぞ。」
「はい。」
セルシアはメロスを一度睨んだ。メロスと一瞬目が合うと、すぐに目をそらした。セルシアはとても悔しそうな顔をしていた。しかし、メロスはその表情をなぜか、かわいく感じた。そんな感情は剣の相手に対しては、今まで一度も感じたことはなかった。不思議な感覚だった。
　そして、セルシアは、王とメロスのどちらにもとれるお辞儀をし、その場所を後にした。メロスはセルシアが見えなくなるまで目で彼女を追い続けた。しかしそれでもメロスの怒りは納まらなかった。
「それにしても、セルシアと戦って、彼女を負かせるその剣の腕前、よほどの剣の達人に教わったと見える…。ところで、メロスよ、どうなんだ？　そなたの気持ちを聞かせてくれ。そんなにも許せないか？」
クラウディス王は言った。
「わかりました、新王。但し一つ条件があります。」
メロスは堂々と新王に対して自分の思っていることを話そうとした。
「条件？　この私に条件か、…よし、その条件というのをここで話すがいい。」
「貴様、新王様の前だぞ、言葉をよーく選んで話すんだな。」
さっきのミゲルが言った。
「昨日、あの広場に磔にされていた、５人の処刑を少し待っていた

だきたい。」
メロスは言った。
「貴様ーっ！　俺の話をきいていなかったのか！　新王様が決めたことにお前なんかが口出しをできる身分じゃないだろう。身の程を考えろ！」
ミゲルがメロスに非難した。新王は震える手を握り締めながら、ミゲルを制した。
「なぜ止めたがる？　そなたは、あの5人の罪がどういうものか知らないのだろう。」
新王は言った。
「では、お聞かせ願えないか？　一体あの者たちがどんなことをしでかしたかということを。」
メロスは悪びれずに言う。
「よかろう。話してやろう。但し、それは今夜話そう。それに、私としてもそなたがこの2年の間どこで何をしていたかも聞きたいのでな。昨夜のお詫びを兼ねて、メロスよ、そなたの訪問を歓迎して、今宵はささやかながら宴を開こうではないか。」
クラウディス王は震える右手こぶしを左手で覆いながら、メロスに話した。

再び、「勇者」としての自信を取り戻したメロス。そして、新王が、捕らえるはずだったメロスのために開く「宴」とは…。そして、5人の処刑の本当の理由とはいったい？　…物語は第3部へとつづく。

次回　第3部　宴での駆け引き　お楽しみください。

第3部　宴での駆け引き

第3部　宴での駆け引き

メロスは公衆浴場のサウナ室から出るところだった。王がメロスに一人、珍しく異性の従者をつけさせた。メロスはサウナ室の端にある大きな大理石の噴水で顔を洗った。噴水の手をかけるところには、「この泉をシラクスの民に贈る、ディオニス王」と書かれていた。

（ディオニス王よ。誰があなたを毒殺なんかに…。あなたは改心した、そしてこれからは民と共に歩もうと決意された。なのに一体誰が…。あなたを殺した犯人はきっとこの私が見つけて成敗して見せます。）

メロスは心のうちでそう決意した。

「メロス様、これで顔をお拭きください。」

その従者が、綿の布切れを彼に渡した。

ありがとう。」

とメロスはその従者に言った。

「それと、キミの名前はなんていうんだい？」

メロスがその従者に名を尋ねた。

「え！？　わたしの名ですか？」

「ああ、名前ぐらいあるんだろう？」

「ええ、あります。ありますよ、メロス様。私の名は…私の名は…。」

「名前は？　そのあとを教えてくれよ。」

「その、あの…、滅多に人から名前なんて訊かれたことがなかったものですから…その、私の名はリセルといいます。」

「リセルか、いい名前だね。俺は…。」

「メロス様でしょ。もうさっきから何回も私があなたの名前をお呼

びしているの、忘れちゃいましたか？」
「あ、そうだったよなぁ。アハハハ。」
「メロス様って、おもしろい方なんですね。」
「そうかな？」
「そうです。そして、私に名前を聞いてくれるなんて、メロス様は心の優しいお方です。そして、剣がとてもお強い方…。」
そういうリセルの顔が赤くなってきた。
「ん？　リセル、サウナでのぼせたのかい？」
「え！？」
「だって、顔がまるでリンゴみたく赤くなってるから…。」
「そ、それは…、そうです。メロス様があんまりゆっくりサウナに入っているからです。だからちょっとのぼせただけです。そ、それよりもちゃんとオリーブの石鹸で体洗いましたか？　これから、王様との晩餐なんですからね！」
「ああ、洗ったさ。まるで、妹みたいな口ぶりだな。」
「妹？　メロス様には妹がいるんですね。」
「ああ、いつもはもの静かなんだけれど、言うときはしっかりと言う口うるさい妹が一人いるよ。」
「その妹と私が似てるんですか？」
「ああ、さっきみたいな口ぶりそっくりだよ。」
「そんなに似ていますか？」
「そうだなぁ…。」
「あ…の、メロス様、その…、あんまり、じろじろ見ないでください…。」
「ん？　どうしてだい？　よ～く見なければ似てるかどうかわからないだろう？」
「…んっもう…メロス様ったら…。」

晩餐会の会場。
「なぁ、リセル？」

「はい、なんですか？　メロス様。」
「このテーブル、イスに比べてやけに低くないかい？　それに、イスもなんでこんなに後ろに伸びてるんだい？」
「メロス様、初めてですか。こういう晩餐は？」
「あ、うん…。」
「心配要らないですよ。私がメロス様のおそばについていてあげますから。」
「うん、そうだな。リセル、今晩はよろしく頼むよ。」
「あ、はい！　かしこまりました。メロス様が恥をかかないよう、リセルは命をかけておしたい…、いえ、命がけでお世話いたします！」
「リセル、これって、そんなに危ない行事なのかい？」
ちょっと心配そうにメロスはなってきた。

「なるほど、寝ながら食事をするのか…。」
メロスは、イスかと思っていたところに横になっていた。
「メロス様、そろそろ王様たちがやってきますから、立ってください。」
すると、
「王様のおなーり。」
と衛兵の声がかかった。

まもなく、クラウディス王が声をかけると晩餐が始まった。
「リセル。」
メロスは声をかけた。
「はい、何ですか？　メロス様」
「この不気味な緑色のソースの正体は何？」
リセルの耳元で囁いた。
「これはですね、魚のエキスのソースです。王様が自らネオポリスの近くのポンペイという町に赴いたときに、その町で一番人気のソ

ースを手に入れてきたという評判のソースだということです。ですから、決してその料理だけは残さないで食べてください。」
リセルもメロスに囁いた。
「しかしなんて臭いなんだ。鼻がおかしくなりそうだ。」
「それでも味はいいですから、口で息をしながら食べてください。」
「わかった。そうしよう。」
「それにしても、服に臭いが染み込まないか心配になってくる。きっといつかこのソースは、消えてなくなるだろう。そう願いたいものだよ。」

「さて、メロスよ、この国の一番北の国境には大きな川が流れている。それは知っているな。」
「ええ。」
「そこには、川の中に島があり、ノグート族が住んでいるのは知っているか？」
「ノグート族ですか、聞かない民族ですね。」
「少数の亜種族だ。我々人間よりも古い種族だ。そして頑固なものたちだ。」
「あの磔の5人はそのノグート族なのだよ。」
「そうだったのですか…。しかしなぜ、彼らを磔にするのですか？」
「見せしめの為なのだ。」
「見せしめの為？」
「そうだ、頑固者のノグート族に知らしめるためなのだ。」
クラウディス王は言った。そして王は話を続けた。
「あの中州は、北東のゴート族に対して戦略的にとても重要な場所にあたるのだ。あのままノグート族だけあの島に住ませておけば近いうちに必ずゴート族はそこから押し入ってくるだろう。それは現在のこの国の状況を考えれば、滅亡のきっかけとなるかもしれん。だから、なるべく早いうちにその島に我々の精鋭部隊の最前線の野営地を造ることを考えているのだ。しかし、ノグート族は自分たち

の土地に人間を入れることを拒んでいる。もちろん、我々の軍隊でなら容易にノグート族を追い払うこともできよう。しかし、その手はなるべく使いたくはないのだ。ノグート族にゴート族と手を結ばれてはやっかいだ。それに見方の少数民族を攻撃したということが国内外に広まれば、周辺の少数民族の町を動揺させてしまう。それも避けたい。できることなら、ノグート族自ら歓迎して、人間を迎え入れて欲しいと考えている。我々がその土地に入れば、森を開墾し、そこにブドウ畑を作り、町の中心には泉を作り、道は石畳で補正もしよう。それに文字も全員に習わすつもりだ。これはノグート族にも悪い条件ではないはずだ。しかし、奴らはとても強情だ。自分たちではろくに戦う手段もないくせに、自分たち種族とこの国の人間を命がけで守ろうとしているものを受け入れてくれようとはしないのだ。だから、見せしめにしようとしたのだ。」

「だから、その者たちを処刑にしようと？」

「そうだ。あやつらがいうことを聞かなければのはなしだ。だが、できることならそれも避けたいのだ。あやつらが言うことを聞けば、あの5人は返してやるつもりだ。」

「で、その期限はいつまでなんです？」

「あと、3日だ。」

「3日…それは難しい…あと最低でも2週間は必要だ。」

「メロスよ。そなたならばあと2週間あったら、あやつらを説得できるというのか？」

「ええ。もし、2週間あれば、きっと私がノグート族を説得してみせましょう。だから、これからすぐに、あの5人を磔から降ろし、鞭も一切振るわずに、ちゃんと食事も、パンとワインだけではなく、新鮮な水も与えてやっていただきたいのです。」

「なるほど、それはおもしろい。15年前、そなたは今は亡きディオニス王と駆け引きをした。そして、見事にそなたは勝った。そして、15年たった今、そなたはまた、こうしてこの町シラクスに現れた。これも何かの縁（えにし）だろう。よかろう、あの5人に2週間の猶

予を与えよう。そして、磔から降ろし、わが城に住まわせようぞ。それならば文句はあるまい？　どうだ？　メロスよ。」
「ええ、それで構いません。」
「しかし、もし、そなたの交渉が失敗した場合、そのときはあの者たちを当初どおり処刑する。また、ノグート族もわが軍隊によって滅ぼされるであろう。それを覚悟できれば、そなたの条件を飲もうではないか。今から2週間後の日暮れまでにノグート族を説得し再びここへ戻ってくるがよい！　期待しておるぞ、メロスよ。」
「わかりました。約束しましょう。必ず、2週間後の日暮れまでにノグート族を説得してここに戻ってきましょう。」
「よくぞ、言い切った、メロスよ。それでこそ、勇者と言えようぞ。私はな、そなたを今まで憎んでおった。そなたの心はあまりにも真直ぐで、裏がない。しかし、それでは政治はできぬ。なのにそなたは最悪のタイミングでディオニス王を改心させてしまった。そして、この国を危機に陥れたと今の今まで思っていた。しかし、そなたは今この難題をいとも簡単に引き受けてくれた。私はそなたに期待をしよう。あの頑固者のノグート族を見事に納得させここに戻ってくる日がとても待ち遠しいぞ。さぁ、さっそく明日の朝、旅立つがよい。必要なものは何でもいってくれ。人も金もなんでも用意いたそう。また、手段はどんなでも構わぬぞ。ノグートの島に野営地を造らせることができるのならば、どんな手を使っても構わぬ。明日の見送りは盛大にさせてもらうぞ、メロスよ。」
　クラウディス王はここ最近になく、久しぶりに愉快になってきた。メロスよ、なんて単純に物事を考える男よ。それがどんなに残酷なことなのか、そなたは気づいておらぬのか？　約束が守れなかったらどんなに人は失望するのか、そなたはわからぬのか？　１５年前と今回とでは全く条件が違うということがそなたにはわかっておらぬのか？　それともそれを知っていてこんな無理難題を引き受けるというのか？
　そのメロスたちのいる空の上には、月が出ていた。しかしその月

は明日にでも新月になろうとしていた。

翌朝。城はメロスの旅立ちを盛大に催した。そして、門のところまで、新王自らも見送った。その左横には、兵隊長のセルシアがいた。また、右にはリセルがいた。

「メロス様、大丈夫でしょうか？」

リセルが心配そうに誰にというわけでもなく尋ねた。

「どうやらお前はメロスが気に入ったようだな。」

その言葉に思わず、セルシアはドキッとした。またそうなった自分にびっくりした。

「リセルといったな？　メロスの世話係としてついていってもいいぞ。」

「え、本当ですか？　王様。」

「ああ、本当だ。但し、メロスの動向を逐一私に報告して欲しい。それができるならばだが…。」

「はい。わかりました。メロス様の動きを全てご報告いたします。」

「それでは、メロスについていくがよい。」

メロスは、足の速い馬を一頭、与えられた。また、クラウディス王の使者としてふさわしい服を与えられた。軍隊の鎧とは違い、軽くて、丈夫なミスリル銀でできた、チェーン・メイルをセルシアから与えられた。また剣も同じ素材のものを与えられた。それは一刻も早くノグート族の住む島にたどり着くには、古からの森である、ケルトの地の「まよいの森」を進まなくてはならなかったからだった。

「メロス様～。待ってください。私も参ります。」

「リセル！？　何を言っているんだ。これから行くところを知っているんだろう？」

「ええ、知っています。王様からメロス様のお世話をしなさいと言いつけられました。だから、その…ご迷惑ですか…」

「迷惑ではないが、危険なんだぞ」

「おいおい、メロスは女一人も守ることができないってわけか？」
「な、どうしてセシリアまで？」
「わたしは、このままそなたに負けたままでいたくはないからだ。」
「それと、ついてくるのとどういう関係があるんだよ。」
「それは…そなたが、その…途中で、化け物や蛮族に襲われたりして命を落とされたりしたら困るからだ…。」
「めちゃくちゃだな。そんなんでよく王が許可したな。」

クラウディス王は上機嫌だった。それは今朝、セシリア自ら、メロスの護衛を引き受けると言ってきてくれたからだった。セシリアは今は亡きディオニス王派の中心的な存在だった。その彼女がいなくなれば、城の権力はますます自分のものになる。また、メロスが途中、何か「偶然」の事故で命を落としたらそれはそれで構わないと考えていた。そこにセシリアも加わっていなくなれば、かえって好都合だった。これはうまい具合にことが運ぶかもしれない…そう思うと愉快でならなかった。

メロスは、新たな約束を新王とした。しかしそれは難題だった。そしてメロスは、シラクスの町を出発した。そこにリセルとセシリアが加わった。その行く手には「まよいの森」が広がっていた…。

次回、第４部「まよいの森」をお楽しみに…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9213s/

続・メロス　―ディオニス王の後世―

2011年7月23日19時25分発行